

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530553

研究課題名（和文）

沖縄における引揚体験の記憶と意味の構築
—台湾、満州、南洋群島、フィリピンを中心に

研究課題名（英文）Memory and identity of repatriates in Okinawa from Taiwan, Manchuria, South Pacific archipelago and Philippines

研究代表者

野入 直美（Noiri Naomi）
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：90264465

研究成果の概要（和文）：

フィリピン、台湾、旧南洋群島、満州からの沖縄引揚者の研究は、3年間の研究成果を『移民研究』第9号（2013年刊行予定）の特集として発表すべく、現在、原稿の最終とりまとめ作業を行っている。

フィリピン引揚者については、沖縄社会における引揚者の戦没者に対する慰霊に関する調査として、沖縄県立平和記念公園内ダバオ之塔で行われる慰霊祭の参与観察と参加者へのインタビューを行った。それにより、慰霊祭が始まった1960年末と現在の慰霊の形、目的、内容、参加者の変遷を明らかにした。また、成果報告を発表するにあたり、戦没者慰霊に関する先行研究（国内外）の動向を調査し、本テーマの位置づけを再検討した。

台湾引揚者については、沖縄県内で刊行された『那覇女性史』や『近代沖縄女性史』などの女性史移住先の台湾の記載は非常に少なく、ほとんど視野に入っていないことを踏まえ、それを補うために市町村誌史の蒐集、整理とともに、台湾経験者およびその家族へのインタビュー調査を行った。

旧南洋群島引揚者については、「旧南洋群島から沖縄へ引揚げた人々の移民経験・戦争体験および戦後経験とはいかなるものだったのか」を、帝国圏他地域からの引揚者の経験と比較検討しつつ明らかにすることを目的とし、これまでに沖縄本島と宮古諸島伊良部島で行った旧南洋群島引揚者149名への聞き取り調査で得られた音声データを文字資料化し、県史・市町村史に掲載された旧南洋群島引揚者の証言と比較・検討した。さらに、この作業によって明らかにされた旧南洋群島引揚者の経験と、他帝国圏から沖縄へ引揚げた人々の経験がどのように共通し、異なるのかを検討した。

研究成果の概要（英文）：

The research results will be published as a special edition on Immigration Studies, Division of Migration studies, Institute for Okinawan Studies, University of the Ryukyus in 2013.

The research of repatriates in Okinawa from Philippines focused on the memorial service. We attended the memorial service in Okinawa and interviewed the attendances. The interview data suggest changes since 1960th when the memorial service started.

The research on repatriates in Okinawa from Taiwan interviewed the repatriates and their family members. One of the topics we focused was gender. There are many publications on women in Okinawa, however, there is little mention on the repatriates in it.

The research on South Pacific archipelago focus on the experiences of migration and wartime experiences of repatriates. We interviewed 149 repatriates in Okinawa main island, Miyako island and Irabu island.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・地域研究

キーワード：引揚げ、沖縄、台湾、満州、フィリピン

1. 研究開始当初の背景

研究代表者（野入）は、これまでに沖縄のアメラジアン、日系人、外国人のインタビュー調査を行い、沖縄社会の内なる多様性についての実証的研究を行ってきた。台湾人は、沖縄の定住外国人の約4分の1を占めているのだが、日本帝国時代における＜双方向的な人の移動＞、すなわち植民地台湾への沖縄からの移動と、台湾から沖縄への移動が重要な背景となっていることがわかってきた。当事者へのライフヒストリー調査を行う過程で、＜双方向的な人の移動＞がもたらしたエスニックな関係性が、現代社会に及ぼしている影響を及ぼしているかに関心を抱くに至った。

また、「語り」のデータを収集する中で、マクロデータとの照合によって位置づけと読み解きを行う必要性を覚えていた矢先に、沖縄県が保管してきた引揚者在外事実調査票について、琉球大学国際沖縄研究所が研究目的の利用の許可をとり、データベース化を開始した。引揚者在外事実調査票には、引揚世帯ごとの本籍、終戦時の住所、世帯主の在外年数・職業・勤務先、家族構成、引揚状況が詳細に記入され、南洋群島13,024世帯、台湾6,523世帯など、合計でおよそ2万5千世帯の情報が集積されている。引揚世帯の資料がこのような規模で保管され、研究のための利用が認められるのは、きわめて異例といえる。そこで台湾だけでなく、満州、南洋群島、フィリピンからの引揚世帯のデータも活用し、数量分析と個人の語りをめぐる質的な研究を相互に補完させた実証的な研究を行うことを計画し、申請に至った。

2. 研究の目的

＜沖縄における引揚げ体験＞のマクロデータを集計・分析する。具体的には、「引揚者在外

外事実調査票」と沖縄県史・市町村字誌の体験記録を資料とし、引揚者の出生地、移動時期、移動先、職業、引揚状況を構造的に把握する。台湾、満州、南洋群島、フィリピンのそれぞれの特性および共通点を析出する。

(2) ＜沖縄における引揚げ体験＞のマクロデータを収集・分析する。具体的には、オーラル・ヒストリー法を用いたインタビュー調査によって、マクロデータからは得られない深みを持つ語り、マクロデータからは捨象されがちであった人びとの「語り」を収集する。

3. 研究の方法

＜沖縄における引揚げ体験＞のマクロデータについて、「引揚者在外事実調査票」と沖縄県史・市町村字誌の体験記録を資料とし、引揚者の出生地、移動時期、移動先、職業、引揚状況を構造的に把握する。台湾、満州、南洋群島、フィリピンのそれぞれの特性および共通点を析出する。

(2) ＜沖縄における引揚げ体験＞のマクロデータを収集・分析する。具体的には、オーラル・ヒストリー法を用いたインタビュー調査によって、マクロデータからは得られない深みを持つ語り、マクロデータからは捨象されがちであった人びとの「語り」を収集する。

4. 研究成果

「引揚者在外事実調査票」と沖縄県史・市町村字誌の体験記録を資料とし、引揚者の出生地、移動時期、移動先、職業、引揚状況の構造的な把握を行った。また、沖縄引揚者のオーラル・ヒストリーデータを収集し、「語り」から見た記憶と表象について考察した。

台湾引揚者については、日本本土と琉球列島への引揚げと定着の実態を明らかにした。

厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』(1978年)や河原功監修『台湾引揚・留用記録』(1997・1998年)など、日本で出版されている資料から、データを収集した。また、沖縄県公文書館が保管する米軍の引揚関係資料と、沖縄県内の地方自治体が出版した『市史』、『村史』などに所収されている引揚関係の資料を整理した。さらに、台湾の国史館文献館が所蔵する『台湾省行政長官公署資料』などの台湾側の資料を収集し、日本側の資料との照合を行った。その上で、沖縄県内の台湾引揚者団体が開催する親睦行事に参加し、参与観察を行った。

満州引揚者については、沖縄出身の満州引揚者への聞き取り調査と、沖縄における戦争の記憶と植民地の記憶に関する文献調査を行った。とりわけ、満州の大都市移住者について中心的に聞きとった。

南洋群島引揚者については、沖縄本島、宮古島、伊良部島、慶良間諸島で引揚者とその家族へのインタビュー調査を行った。

フィリピン引揚者については、引揚者のインタビュー調査と、沖縄県史・市町村史からのデータ収集を行った。また、沖縄ダバオ会による沖縄・フィリピンでの慰霊祭、「里帰りツアー」の参与観察を行い、引揚者団体の活動を把握した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. Matsuda, Hiroko, 2012, *Becoming Japanese in the Colony: Okinawan Migrants in Colonial Taiwan*. *Cultural Studies*, vol.26, no.5, pp. 688-709. 査読有

2. 蘭信三「序論—いま、帝国崩壊とひとの再移動を問う」『アジア遊学：帝国崩壊とひとの再移動：引揚げ、送還、そして残留』145巻、pp.4-10, 2011. 査読無

3. 飯島真里子「フィリピン日系「帰還」移民の生活・市民権・アイデンティティ：質問票による全国実態調査結果(概要)を中心に」『九州大学アジア総合政策センター紀要』第4巻 pp. 34-54, 2010. 査読有

4. 野入直美「植民地台湾における沖縄出身者—引揚者在外事実調査票から見えてくるもの」『アジア遊学：帝国崩壊とひとの再移動：引揚げ、送還、そして残留』145巻、pp.159-169, 2010. 査読無

[学会発表] (計2件)

1. 森垂紀子, 戦時期南洋群島における資源開発の変容—熱帯資源開発から軍事基地建設へ—, シンポジウム(座長：野田公夫) 日本帝国圏における農林資源開発—「資源化」と

総力戦体制の比較史—東京農業大学, 2013年03月28日.

2. Hiroko Matsuda “Taipei as my Hometown : Taipei’s Community Movement and Preservation of Japanese Colonial Legacies” 2nd. IEAS-RIKS Forum – Cross - Currents: Movement, Migration, and Mobility in East Asia Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley, U.S.A. 2011年6月24日

[図書] (計4件)

1. 蘭信三監修、『人の移動事典：日本とアジア』丸善出版、2013年9月刊行予定。

2. 蘭信三編著、『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交差点』勉誠出版、2013年7月刊行予定

3. 野入直美「沖縄における外国人に対する意識」安藤由美・鈴木規之(編著)『沖縄の社会構造と意識』九州大学出版会、323中67-97, 2013.

4. 国永美智子・野入直美・松田ヒロ子・松田良孝・水田憲志(共編) 石垣島で台湾を歩く：もうひとつの沖縄ガイド、沖縄タイムス社、2012.

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野入 直美 (Noiri Naomi)

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：90264465

(2)研究分担者

蘭 信三 (Araragi Shinzo)
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：30159503

飯島 真里子 (Iijima Mariko)
上智大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10453614

(3)研究協力者

松田 ヒロ子 (Matsuda Hiroko)
神戸学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：90708489

森 亜紀子 (Mori Akiko)
京都大学大学院・農学研究科・博士課程院
生

坪田(中西) 美貴 (Tsubota(Nakanishi)
Miki)
上智大学・外国語学部・研究員